

今やらねば

田中館愛橋の生涯

⑮



「メートル法編」

容易ではなかった普及

田中館愛橋の業績は多岐にわたっている。先に紹介した「地磁気の研究」は、近代科学の本格的導入からわずか30年余りで、観測のみならず理論的研究の面でも日本が欧米の水準に迫ったことを示すものだった。

田中館の発明した、高度な観測機による西洋に負けない観測精度と、観測から導き出された独自の見解による理論は、国際研究者の一員として認められるに十分な働きであった。

一方で田中館は、「度量衡」の国際化に汗を流す。いわゆる「メートル法」を日本に持ち込み、推し進めた。メートル法の導入は、日本が西洋列強の仲

間入りをするために取り組むべき大きな課題の一つであった。

度量衡とは、物の「長さ」や「重さ」、「量」などを測る単位のことだが、かつてそれらの単位は国ごとに独自に決められていたので、交易やさまざまな面で不都合であった。1790年、世界中の度量衡を統一する目的で「新しい度量衡を創設しよう」という動議が、フランスの帝国議会に出された。以後、さまざまな苦勞の末、基本的事項が決められたという。

田中館は、著書「toki wa uturu」1927（昭和2）年にローマで開かれた万国度量衡回議に出席中の田中館愛橋（左） 田中館愛橋記念科学館提供



で「万国測地会議への参加が縁故となって、メートルの国際的普及には東洋も必要として引き出され、1907（明治40）年から1年おきにパリに行つた」と残している。

21（大正10）年、日本でメートル法が公布されたが、それまでの、尺・寸（長さ） 升・合（量） 町・坪（広さ） 貫・匁（重さ）といった単位は変わらず使われていた。メートル法が完全に実施されたのは59（昭和34）年からである。

メートル法の普及と定着は容易ではなく、田中館がその普及に苦勞したことをうかがわせる資料が残る。25（大正14）年5月5日に行われた「メートル法の起源とその応用」という講演をまとめた内容で、メートル法の起源に始まり、単位名称、十進数の採用、単位の種類などを詳細に説明し、さらに応用について力説している。

1875年の国際的なメートル法条約調印から50年目の講演である。85年に加入した日本はその普及は終わったとされるが、今日でも「二間幅」「一

升」といった単位は日常生活に残っている。田中館たちが国際化に必要と取り組み続けた、「世界と同じ合理的な物差し」メートル法の普及と浸透には、どれだけのエネルギーと忍耐が必要とされたことだったろうか。

（中村誠 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 講演で国字問題

ローマ字を力説

本文の田中館の講演には、さらに「国字問題」が続く。「メートル法に次いで解決を要する大問題は、国字問題である」と述べ、「世界に日本語を広めるには、どうしても世界の文字なるローマ字でなければはかどらぬ」と力説。メートル問題はいつの間にかローマ字問題に移っている。ある時、航空に関する講演依頼を受けた田中館が、先方から「ローマ字の話は入れないで」と言われると、即座に「それならお断りする」と言ったという。